

## 東亜同文書院と郷土（石川県、金沢市）の人々

愛知大学法経学部法学科 昭和46年卒 脇水 達生

(2022年9月24日、石川県政記念しいのき迎賓館)

### はじめに

ご紹介いただきました脇水です。話があまり上手でないのに紙を見ながら説明することが多くなると思いますのでよろしくお願ひいたします。「東亜同文書院と郷土（石川県、金沢市）の人々」というテーマです。

東亜同文書院は前身校が日清貿易研究所ということになりまして、現在の愛知大学は後身校です。時系列に沿って説明できれば分かりやすいと思いますが、必ずしもそうじゃないのでよろしくお願ひします。先ほどご紹介ありました私は昭和22年の生まれで団塊の世代という世代なのですが、愛知大学が昭和21年に創立ですから翌年になります。現在75歳です。松任の米を主に作っていた農家の次男ということで生まれました。私が愛知大学という名前を知ったのは『朝日ジャーナル』という雑誌が昭和33年ぐらいに創刊されたのですが、その中に「大学の庭」というシリーズで全国の100校弱の紹介がありました。それを読んで愛大は面白そうな大学だなという印象があったわけです。うちは米作の農家ですので、別に朝日ジャーナルを読むような親ではないのですが。うちの親が戦争中に上官だった人が朝日新聞に勤めておいでまして、その人が新聞社から新しい雑誌だから買えって言われたのではないかなと思います。その人が定年になるまで家（うち）まで送ってきてもらいました。私が愛知大学へ入ったということで、多分父が連絡し

たのだと思いますけど。東亜同文書院の後継校だということはどう思ったか分かりません。その方が大阪のほうへ勤めていたのですが。東亜同文書院からは朝日新聞社にたくさん入社しておりまして、私もそんな立派な成績でもないのですが、その方がもしアルバイトがしたいなら朝日新聞の豊橋支局に知っている人がいるから訪ねてくれという連絡がありました。私はその頃大学に入ったばかりで慣れない寮の生活が始まっていたのでアルバイトの必要は感じなくてそのままにしておりました。この「大学の庭」というのは、書いた人が永井道雄という人で、当時、東京工業大学の助教授でした。三木武夫さんが、田中角栄さんのあとで総理大臣になった時、文部大臣になられました。その人のお父さんというのは金沢出身で、早稲田大学の教授で代議士にもなって色々大臣もなされた方です。

### I 東亜同文書院、愛知大学、日清貿易研究所とある郷土の人々

金沢と愛知県というのは全然関係のないような気がしますけど。前田利家という加賀藩の初代藩主は、尾張の国の荒子村という現在の名古屋市中川区荒子というところの出身で、愛知大学の現在の名古屋キャンパス、あおなみ線という電車が通っています。愛知大学のささしまライブ駅から3つ目の駅に荒子という駅があります。そこへ

降りますと、前田利家初陣の像があります。荒子城はそこから歩いて 20 分ぐらいだそうです。前田利家の奥さんのまつという人は、10 歳ぐらい年が離れているのですかね。銅像の脇に女の子の銅像もあります。近衛文麿の母は加賀藩の 14 代藩主、前田慶寧と書いてよしやすと読むのですけど。その人の三女でさわという方です。字はちょっとパソコンで探したのですけど、出なかったのです。平仮名で書いてあります。そのような関係で石川県とあまり関係なさそうですけど、そういう関係もあります。豊橋には後で気がついたのですけど。白山比咩神社が広小路の辺りにあります。

私は昭和 42 年に愛知大学に入学しました。その年ちょうど金沢は市内電車が廃止になりました。豊橋は現在も市内電車走っておりますけど。廃止になった市内電車の車両を豊橋のほうへ持ってきて運行しているという新聞記事を見たことがあります。順番にいきますと、大村欣一という人は金沢出身で、四高を出まして、東京帝国大学を卒業して東亜同文書院の教授になりました。東亜同文書院の院歌を作詞した人で、実家は印刷業をされております。現在も金沢の港のほうに会社があるそうです。小竹文夫さんという人は、金沢市出身で東亜同文書院を卒業して京都大学。その当時は、京都帝国大学を卒業されまして同文書院の教授になられました。東亜同文書院に入学する前に、一時、松任小学校の教員をされていたことがあります。次に土井伊八という人です。松任出身の人で日清貿易研究所を卒業されて、実習機関として商品陳列所というところで研修されまして、日清戦争になり一時閉鎖していたのですけど、

根津一所長からその後の管理を任されて、その後、独立して貿易商社活動を始めておられます。野村喜一郎という人は、近江町市場で魚や野菜を扱う仕事をしていました。先祖は加賀藩にそういう物を納めていたのですけど、明治維新になりまして軍隊ができたなら軍隊のほうに魚菜を納めていました。この人は日本と外国との貿易を盛んにしなければいけないということで、石川県から留学生派遣に対して県のほうに意見をしました。留学生の選考にもあたったということです。近江町の通りをはさんだところに、市姫神社という神社があります。そこにこの人の顕彰碑があります。脇坂雄治という人は私のゼミの先生です。富山県の人ですが愛大の学長もされておりました。ここの四高を卒業しまして東大を出て裁判官をされていたそうです。弟が田部重治という人で、『山と溪谷』という本を書いておられます。薬師岳の登山の途中に太郎平小屋という山小屋があります。その看板は田部さんが書かれたものです。私は何十年も前に登った時は確かにその看板がありました。胡麻本蔦一先生は労働法とか比較法学の先生です。日露協会学校、後にハルピン学院という名前になりますけど、その 2 期生です。1 期生が有名な日本のシンドラールと言われる杉原千畝です。胡麻本先生の娘の岡田ルリ子さんという人は、現在も能登島に住んでいるじゃないかと思っております。元中部日本放送のアナウンサーでした。金沢で朗読会とかある時、何度かお会いしました。それから、園部逸夫さんという元最高裁判所の判事ですけど。この人は台北高校から戦後、隣の四高のほうへ転入されまして、日本寮歌振興会の会長でしたが、

現在は愛大のOBの高井和伸弁護士がされております。園部さんの父親の園部敏さんは愛大の法律の先生で、園部さんは夏休みに愛大の校庭で畑仕事をしたそうです。

創立当時は大学の先生も家がないものですから、大学の中に色々住んでおられました。今、グラウンドになっているようなところがみんな畑でした。砂山幸雄さんは現代中国学部長で、この人は珠洲市出身です。東大を卒業されています。小倉正恒という人は、愛知大学豊橋図書館の簡斎文庫の元の所有者で、東亜同文会の理事もされておりました。金沢の泉鏡花、徳田秋声と同級生で3歳年上に細野燕台、北大路魯山人を育てたという人がいました。四高では、山崎延吉、それから安宅弥吉。安宅弥吉という方は、安宅産業の創設者です。山崎という人は愛知県の安城農学校の初代の校長をされた人です。小倉正恒は、この人は晩年、郭沫若文庫の建設の発起人となって色々資金集めとかされていたそうです。郭沫若という人は中華人民共和国の初代の副総理です。東亜同文書院時代の中国語編纂のためのカードがあったのですけど。終戦で中国に接収されて返還を願い出たら返ってきてまして、豊橋市の市長が中国を訪問した際、郭沫若から書が送られて、多分愛大にあるはずです。浅野巧美（よしみ）という人は同文書院で事務をされていました。東京の九段会館の近くの旅館で初めての愛大創設の会議に出席しました。多分、小松市辺りの出身じゃないかと思います。よく分かりませんが。初期の頃、頑張られた。川崎一郎という人は愛大同窓会2代会長で、国際法の助教授をされていました。同文書院の44期だそうです。この人は私の入学する

前に亡くなってお目にかかったことはありません。15番の三田良信さんという人は同文書院の42期。金沢大学、北陸大学で中国語の講師をされておりました。『石碑でめぐる金沢歴史散歩』という本を出されておまして、北方心泉とか大村欣一などについて色々調べられております。

## II 簡斎文庫をめぐる物語

「簡斎文庫をめぐる物語」ですけれど、私が先ほどご紹介にあたって、翠嵐寮友会で毎年文集を出しておりました『北門』という文集ですけれど、その7号に書いたものの下書きです。ちょっと読んでみます。愛知大学豊橋図書館の漢籍コレクション、簡斎文庫、約3万冊の元の所有者は石川県金沢市出身の小倉正恒であることから、以前から関心があったので調べているうちに簡斎文庫には様々な人々が繋がり合う様子が分かった。漢文の知識がないのでここでは簡斎文庫に関わる人々について記してみたい。小倉正恒は明治8年、金沢で生まれ、大正、昭和に経済、政治の分野で活躍した人で、第四高等学校卒業、東京帝国大学法科大学を卒業、内務省に入ったが先輩の誘いで2年後の明治32年に住友に転じ昭和5年に最高指導者の総理事となった。昭和8年に貴族院議員となって、昭和16年には住友を退社し第二次近衛内閣で国務大臣、第三次近衛内閣では大蔵大臣となったが、いずれも3か月の短命内閣であった。昭和17年に戦時金融金庫総裁に就任したが、戦後、公職追放で昭和36年に没している。小倉の父は金沢藩の藩士で、維新後は裁判官として県内の裁判所に赴任したため、父母と別居し小学生の頃は祖父母と暮らしていた。

馬場小学校では泉鏡花、徳田秋声と同級で3歳上には後に北大路魯山人を世に出した文人、茶人の細野燕台がいた。

明治中期に金沢では「書は心泉、詩は岐山」と言われていた。つまり、書道は北方心泉、漢詩は木蘇岐山、文章は五香屋休哉、経書は三宅直軒を第一人者としていた。小倉はこれらの人の門をたたき、後年まで先輩として尊敬していた。小倉の高校までの学費は細野燕台の父が出していたが、燕台が五香屋休哉に漢文を習い始めた頃、小倉も同行して学んだ。休哉は薬の製造、販売を生業とした。家に生まれ幼くして両親を亡くしたから漢文は師とする人もなくほとんど独学で勉強した。内藤湖南という人は京都大学の先生で東洋学の第一人者です。休哉の学識に注目して東京に出るよう勧めたが応じなかったという。大正9年、59歳で没している。三宅真軒は年少の時は親戚の人から素読を受けて、後に昌平黌で学を積んだ井ノ口犀川の教えを受けた。明治18年の頃、東京で漢文科の教員試験を受けた際、試験官は答案用紙を見て感心して自宅へ呼び、学問方法を尋ねたということである。小倉は第四高等学校で三宅の講義を受けていて、その後、四高校長の北条時敬が広島高等師範学校に転じた際、三宅も広島に移った。小倉が大阪にいた時は夏休みに三宅を自宅に呼び住友の社員に講義を聞かせたということです。大正5年に三宅は東京に移り前田家の蔵書を整理して、蔵書目録を編集した。小倉は上京後に三宅を訪ね指導を受けている。昭和15年、82歳で没している。三宅の蔵書4万5千冊は無窮会文庫に納められていると。北条時敬は後に東北帝国大学総長となった人で四高校長の

時代、総理大臣の伊藤博文が金沢へ来た時、伊藤宛に一筆したためた。伊藤は女好きということで、金沢は学徒も多く指摘を受けることのないようくれぐれも注意してほしいという内容であったが、伊藤の金沢の滞在中は問題も起きなかったとのエピソードが、兼六園の金沢神社の北条時敬顕彰碑に刻まれている。最近嘘をついてまで付度して栄転した高級官僚は、北条の爪の垢でも煎じて飲んでほしいと思うのは私だけだろうか。

東亜同文書院の教授で院歌を作詞した大村欣一は、県立中学校で三宅の授業を受け四高から東大の支那文学科まで進学し漢文を学んでいた。岐山に小倉が師事したのは大阪に移ってからで、大阪の前は金沢にいて休哉、真軒、心泉らと交流があった。五千卷堂主人と号し、多くの漢籍を所有していたが、大正5年60歳で没し、その蔵書を引き取り簡斎文庫の一部となった。小倉は昭和19年、大阪商科大学、現在の大阪公立大学、教授の山根徳太郎に文庫の整理を依頼し、京都の東邦文化研究所の漢籍目録に準拠し約3年半かかった。山根はその後、難波宮を発掘したことで知られている。小倉はこの文庫を懐徳堂に納めることを望んでいたが懐徳堂は昭和20年の空襲で講堂事務室が焼けたために実現しなかった。懐徳堂とは江戸時代に大阪町人の出資による漢学塾で、後に小倉は懐徳堂の理事長をしたことある。現在、懐徳堂は適塾と共に大阪大学のルーツの一つとされている。適塾というのは緒方洪庵の塾です。愛知大学に簡斎文庫を譲り受ける話が昭和23年4月にまとまり、4月、5月に順次到着し、図書館に配架を終え、資料によっては愛知大学

に寄贈したことになっていたり、愛知大学が購入したとっていますが、実際は当時、愛知大学の理事であった東亜興業社長・梅村清（豊橋）が購入し大学へ寄贈したものです。梅村清は繊維関係の会社を経営して、当時はガチャマン景気と呼ばれるほど繊維産業も景気が良かった。実際どれぐらいの金を出したのかは明らかにされてない。本間学長が最高裁判所の事務総長であった頃、小田原に住んでいた最高裁長官の三淵忠彦と同じく小田原在住の、電力の鬼と呼ばれていた松永安左エ門からお茶に誘われて同席したことがあった。松永は小倉と親交もあって漢籍にも詳しい。三淵に対し1千万円ではとても買えないものと言われ本間は驚いたという。現在と物価も異なり比較が難しいが、愛知大学の設立費用が100万円。豊橋市が50万円出して、後は他の人が50万円。当時の愛知大学の決算額は477万円の時代のことで、1千万円というのは大変大きな金額です。

昭和35年2月に、愛知大学漢籍分類目録が刊行され簡齋文庫と霞山文庫が収録されている。編集にあたったのは内藤湖南の子息の内藤戊申（しげのぶ）教授で、現在名誉教授である中日大辞典を編纂された今泉潤太郎先生や、当時学生だった新村徹も参加している。新村徹という人は『広辞苑』の編集で有名な新村出の孫で、文学部で中国文学を専攻し、その後都立大学の博士課程を修了し、桜美林大学の教授をしていたが交通事故で亡くなっています。京都の地下鉄、烏丸線の鞍馬口下車で重山文庫というのがあって私も行ってきました。新村さんのお兄さんにお話をしたかったのですが、お客さんが来ましてその時は帰ってきまし

た。簡齋文庫について調べるうちに、この文庫をとりまく様々な人々が登場し、創設時は蔵書が70冊だった愛知大学図書館も様々な人の努力で、現在170万冊という全国の大学でも屈指の図書館に成長しています。「簡齋」これは有名な中国の書家の呉昌碩という人の書です。簡齋文庫と一緒に愛知大学に来ております。

### Ⅲ 日清貿易研究所の開設

次のページ、4ページです。日清貿易研究所関連の年表ということでもあります。荒尾精という人が参謀本部から清国へ派遣されて岸田吟香という人と知り合って漢口楽善堂という薬屋兼本を扱う店を始めまして、中国の様々な情報をメンバーと共に集めました。荒尾は日本に帰って報告書を出しまして、明治22年の10月に金沢市で講演会を開催しております。金谷館というところでは、金谷館というのは今の尾山神社の隣に元の郵政省の施設がありまして、そこに「北陸の鹿鳴館」と言われた施設がありました。そこと工業学校が、当時は兼六園の中にあつて、現在の石川県立工業高校の前身です。そこで講演会をしました。石川県からの留学生を派遣してほしいということで、明治22年12月に県費留学生を派遣することが決定しました。ひと月13円補助するということ。13円というのは高いのか安いのかちょっと分かりませんが。ある大学の先生の論文を見たら、当時、東京帝国大学で仕送りが高い人で8円。安い人で6円であったということです。海外ということもあると思いますが。そういう金額です。

明治23年4月、留学生が選抜されまして、9月20日上海の憶鑫里（おくきんり）

に仮校舎を開校しました。この年の暮れに野村喜一郎が石川県金沢市の囑託によって上海に渡って貿易状況を観察し、将来に関して調査をしています。11月9日、つば甚、つば甚というのは今も有名な料亭ですね。送別会で50人が出席したと。明治24年の6月に競馬場の向かいの洋館に移転しました。長崎高等学校校長の、猪飼麻次郎という人が教頭に就任しました。明治25年12月、荒尾精が漢口楽善堂で中国各地の情報を集めたものを、根津一という人が『清国通商綜覧』という本にして出版した。それで明治26年6月に、89人の卒業式をしまして、日清貿易研究所は1期生だけで閉鎖となりました。その後、日清貿易陳列所が、中国名で瀛華広懋館(えいかこうぼうかん)というのですが、大阪の岡崎栄三郎という人の出資で開設されました。荒尾精は明治29年10月に台湾で亡くなっております。

日清戦争に勝って賠償金をもらえ、そういう意見が多かったのですが。そんなことするのは良くないということを主張して色々叩かれもして、それに対しては反論を書いております。日清貿易研究所について以下の文章に書いてあります。時間になりましたので申し訳ないですけど説明をこれで終わらせていただきます。

### おわりに

東亜同文書院、日清貿易研究所、愛知大学に関わりある石川県、金沢市の人々について記していますが、東亜同文書院は全国各県から留学生を派遣しております。地域的には九州の人が多いと思いますが、今後各地でこのような調査を続ければ、東亜同文書院、愛知大学の人脈の深さが明らかになると思います。